

米議会公聴会で証言した「コロナ禍の英雄」に対する非難は妥当か？

6/14(金)ForbesJapann



2024年6月3日、ワシントンDCのレイバーン・ハウス・オフィス・ビルで、国立アレルギー・感染症研究所前所長のアンソニー・ファウチ博士が、下院監視・説明責任委員会のコロナウイルスパンデミックに関する特別小委員会で証言した (Photo by Chip Somodevilla/Getty Images) (フォースジャパン編集部)

6月3日、米下院委員会公聴会で、引退したばかりの国立アレルギー感染症研究所 (NIAID) の前所長、アンソニー・ファウチ博士が、COVID-19 (新型コロナウイルス) パンデミックに対する米政府の対応とウイルスの起源について初めて証言した。

しかし、公聴会はかつてないほど荒れ、後味の悪いものとなり、将来パンデミックが来たときのアメリカの保健防衛にも大きな傷跡を残した。この「荒れ」と「傷跡」は少し遅れて必ず日本にも上陸すると思われ、囁かれている日本の政権交代でも議論の目玉の1つとなりそうだ。

■公聴会に寄せられた多くの批判

アメリカ議会の公聴会は、常に政治がかかっているため、聞き苦しい不要な批判や非難があり、一方では顔を赤らめるほどの賛辞なども混在する。多くの米国民は、議会には関心なくとも、公聴会には大きな興味を寄せ、選挙で民主党と共和党のどちらに投票するかの参考にしたりする。

特に国民のプライバシーや安全、さらには国防や最高裁判事の任命などとなると一層の盛り上がりを見せる。Facebook (メタ社) のマーク・ザッカーバーグやトヨタの (当時の) 豊田章男社長が公聴会に呼び出され、それぞれ会社の管理監督責任を厳しく追及されたのも記憶に新しい。

ファウチ博士はパンデミックが始まった当初から積極的に記者会見をして、個別に具体的

なマスコミのインタビューにも応じ、アメリカのコロナ対策の羅針盤となった人物だ。感染症の現場のデータは州政府の公衆衛生局に集まり、連邦政府はその伝聞情報に頼るとい
うハンディを言い訳にせず、どんな質問にも逃げなかった。

職務上、当然、党派に偏ることのない中立な発言に終始したが、トランプ政権のときに始
まり、バイデン政権時に事実上収束したパンデミックの過程で、いかにも「トランプを落
選させた張本人の1人」とラベルを貼られ、本人の意思とかかわりなく共和党員に非難さ
れる存在ともなっている。

とはいえ、民主党員に賛辞されるかという、パンデミックで亡くなったり、仕事を失っ
たりした人に配慮して、正面切って賛辞する民主党員はそれほど多いわけではない。後述
するが、アメリカのリベラルコンセプトを代表するニューヨーク・タイムズ紙も、パンデ
ミックを振り返るコラムを載せながら、その中心は博士への批判だ。

連邦行政機関で働く以上、そのトップが政治利用されるのはややいたしかたないことであ
るとしても、一民間人を議員たちが自分たちのパブリシティに利用し、票の獲得のために
罵詈雑言を浴びせ、個人攻撃をするにまでいたった今回の公聴会には多くの懸念が寄せら
れている。

たとえば、ジョージア州の共和党女性議員マージョリー・グリーンは、「あなたのことを博
士だとは認めない」として、博士号は剥奪されるべきだとまで言って公聴会を一時中断さ
せたばかりか、ファウチ博士を投獄すべきだと述べた。

その理由としては、米国がロックダウン政策をとり、国民に不要不急でない外出を禁じて
いる際に、ファウチ博士が家族とスポーツイベントに出かけているように見えるスクープ
写真を提示して、「自分だけ特別じゃないか」と思っているのではないかと非難したところ
に由来している。

このほか、マスク政策、6フィート離れるソーシャルディスタンス政策、ワクチン政策、
すべてにおいて、「あれはもっとうまくやれるはずだった」という非難も浴びせられた。

1980年代のレーガン政権の頃から国立アレルギー感染症研究所の所長を務めてきた83歳
の科学者は、喋りも饒舌で、論理も明快だが、それでも複数の議員から怒鳴られ、責めら
れ、涙ぐむ様子もテレビに映された。

かつての英雄に浴びせられる非難

しかし、すでに過激となるだろう選挙の前哨戦に疲れ切った国民の間では、「あれはもっと
うまくやれるはずだった」という非難はフェアでないという見方が多い。

あの新型コロナウイルスの上陸時、医療崩壊寸前までいった事態のなかで、崩壊させずに
ワクチン開発までの時間を稼いだロックダウンは、やむを得なかったという意識がアメリ
カでは定着している。

また、ワクチンの健康被害を訴える人がいる一方で、多くの国民は複数回のワクチン接種
を選び、グーグルなどの大企業の多くは、社員の健康を守るために社内ルールとしてワク
チン接種を出社の条件としたことを、いまでも正しい選択だったとしている。

マスクも、その限界を当然認識しながらも、慢性疾患を持っているアメリカ人旅行者がい
までもマスクをして移動することを、むしろ社会通念の「向上」ととらえている。

正体不明の敵を前にして、あれだけ論理をつくし、しかも国民にわかりやすく自分の口で
対策を語りかけたファウチ博士は、それまで確実に英雄視されていた。

コロナ禍の前は、クリントン政権下のエイズ渦の混乱のなかで、ファウチ博士はやはり大統領にアドバイスをし続け、HIV感染のメカニズムを解明したおかげで、現在「エイズ＝死」という見方も後退している。

そのほか、SARS や鳥インフルエンザ、豚インフルエンザ、MERS、エボラ出血熱など、アメリカ人が脅威に感じた感染症の対策を常に先頭に立ってファウチ博士は講じてきた。民間人に与えられる最高の勲章、大統領自由勲章を受けているし、日本も天皇陛下が旭日重光章を授けている。

行政の長官としての働き以上に研究者としても、(科学情報研究所によれば) 20 年間にわたって最も多く科学論文に引用された科学者として世界で 13 番目という驚異的な偉業をとげている。

しかし、コロナ禍では、その緊急性ゆえに「まず語って安心させること」を優先させ、あとになって事実と違うことが判明したことはあった。

たとえば、研究所での業務メールには個人メールを使ってはいけないというルールになっていて、「そういうことは断じてない」と言った後に、部下の 1 人の 1 件の個人メール使用が明らかになり、今回の公聴会でもさんざん「情報公開法違反であり、あなたの責任だ」と非難された。

あるいは、当初、アメリカにマスクは一般的に流通していない事情もあり、マスクの効果はないと説明したのちに、それを撤回して、着用を義務付ける指針を打ち出したのも、混乱させたと言われ、非難されることになった。

また「あなたはたった 1 人のコロナ患者の診察もしてない」と、公聴会で非難されたことも、研究所の所長に対しての質問としては最大級のいじわるでしかないが、医者としての権威に国民が依る以上、言い訳のできないつらい受傷だ。それとは逆に、慎重を期すべく科学的に明らかになっていないことに対して「わからない」と明言したことを、不透明な運営だと非難された。

個人攻撃に対する重大な懸念も

コロナ禍が始まってすぐにアメリカでは「中国ウイルステロ説」が流布され、それをトランプ前大統領も同意するような言説を繰り返したが、パンデミックの正確な発生経緯は未だ確証を持ってわかっていない。民主党寄りと言われるニューヨーク・タイムズ紙も、6 月 9 日の紙面で、「あれは不透明な運営」だと非難のコラムを載せ、ウイルスは人工的な改変の可能性が高いという趣旨を伝えている。しかし、確証のないものを科学者がそうだと断じたときにそれが国策に与える影響を思えば、その非難は行きすぎだとの感想を抱いてもおかしくない。

またワシントン・ポスト紙によれば、前述の共和党女性議員マージョリー・グリーンは、いまでこそ感染症の権威のようにふるまってテレビ画面では大活躍だが、委員会の過去 10 回の会議のうち 7 回を欠席していたほどの無関心ぶりだった。

国民が関心をもったのは、ファウチ博士のこの個人攻撃に加え、いまだに彼とその娘たちが脅迫され、殺害予告を受けるなどの目にあっているということだ。

国難を乗り切るのに、身を挺して働いた科学者に、刑務所に行けとか、博士号剥奪だとかとマイクに載せて国会議員が叫び、それに触発されてコロナ禍で受けた被害やストレスを発散すべく人々が鬼呼ばわりすることがこの国のためになるだろうか？

ファウチ博士は公聴会では、こうした個人攻撃が「優秀な人材がこの分野に参入することの『強力な阻害要因』になると懸念しています」と静かにしめくくった。

この職務に求められているものは予防だ。予防の仕事では1ミリのミスも許されない、それがパンデミックの終わったのちに非国民扱いされるのだとすれば、こうした仕事に参入する研究者がいなくなるという懸念は妥当だ。お金にならない予防の仕事に就くくらいなら、もっと金儲けができて、議員や国民からの罵詈雑言を浴びない仕事は、医療業界にはいくらでもあるのだから。 長野 慶太